

# 令和2年度 自己評価表

倉吉市立成徳小学校

<p>学校教育目標</p>	<p>「自学・自治・創造」の精神に満ち、心豊かでたくましく生きる人間づくりを目指す。 【本年度の教育目標】 ○主体的に考え、行動し、かかわりながら課題を解決する児童の育成</p>	<p>めざす子ども像</p>	<p>○自学 ・主体的に取り組み、かかわりながら学ぶ子 ・課題解決のために自分の考えにチャレンジする子</p>	<p>○自治 ・主体的に暮らしの問題を解決する子 ・命を大切に、感謝の気持ちを大切に子 ・よりよい生活習慣を身につけようとする子</p>	<p>○創造 ・他者と協力して新しい考えを生み出し、豊かに表現する子 ・自分の可能性を見いだそうとする子 ・自然を愛し、学校を愛し、郷土を愛する心を持つ子</p>
---------------	---	----------------	---	--	---

年度当初			評価結果(2月)				
評価項目	現状	めざす姿	具体的方策	評価方法	経過・達成状況	評価	改善方法
主体的・対話的で深い学びを育てる	長年にわたり一貫して自学・自治・創造の教育を推進してきたことにより、明るく、物事にまじめに取り組む児童が多い。しかし、進んで学習に取り組む態度や、自分の考えを表現し、関わり合いながら学び合う力は、さらに伸ばしていくことが必要である。新学習指導要領の目指す「主知的・対話的で深い学び」を実現するために、本校の取り組んできた「学び方学習」をもとに、授業改善を進めていく必要がある。	○主体的に学ぶ子	○課題意識を高める授業づくり ○「学び方学習」の見直しと実践 ○読書意欲と質を高める働きかけ	○学校評価アンケートの家庭学習に関する設問への児童のプラス評価を70%以上にする。 ○学び方アンケートの学習中の設問に対するプラス評価を70%以上にする。 ○年間読書量(高学年80冊、中、低学年100冊以上)の児童を全校の80%以上にする。 ○1人1人の読書内容を月ごとに把握する。	○評価方法に挙げた学校評価アンケート、学び方アンケート、年間読書量の達成値は、どの学年も達成できた。 ○読書数は月ごとに把握できたが、選書内容までは把握できなかった。	B	○「学び方学習」について職員の間で共通理解と児童に対する価値付けを行い、児童がより主体的に学習に取り組むことができるようになった。 ○学級の読書状況を毎月のデータで把握しながら情報交換を行ったり、国語の教科書「本の世界を広げよう」の活用を図ったりしながら読書の働きかけを行う。
		○基礎的な知識・技能を身につけた子	○単元や1時間の到達目標を明確にした指導と評価の工夫 ○授業研究後、提案された内容を全学年が2つ以上実践する。 ○ICTの効果的な活用 ・教科や授業内容に合わせて、効果的にICT機器を活用した授業を実践する。 ・学期に1回以上、児童がICTを活用する授業を行う。	○学び方アンケートの「今日学んだことがよく分かる。」という設問へのプラス評価を70%以上にする。 ○学校評価アンケート「職員用アンケート」のICT機器の活用に関する設問へのプラス評価を70%以上にする。	○評価方法に挙げた学び方アンケート、学校評価アンケート、学び方アンケートの達成値は、どの学年も達成できた。 ○ICT機器の活用については、リモート学習の実践を通して行うことができた。 ○デジタル教科書を12月より活用することができた。	B	○1時間ごとの授業を大切に、今年度共通実践してきた項目を中心に日々の授業で継続して実践していく。 ○定期的にICT活用を行った授業の情報交換を行いながら、さらにICT活用の推進を図る。
		○関わり合いながら学び合う子	○「対話」活動を活性化する働きかけ ・発問の工夫と精選 ・対話を深める問い返し	○学校評価アンケート「児童用アンケート」の表現や説明に関する設問に対するプラス評価を70%以上にする。 ○学び方アンケートの表現や対話に関する設問へのプラス評価を60%以上にする。	○学校評価アンケートについては達成率を上回り、「自分の思いや考えを伝えている」と感じる児童は80%に達している学年もあった。 ○学び方アンケートについては学年差があり、プラス評価の60%を達成できなかった学年もあった。	B	○自分の発言が相手に伝わっているかということや、根拠を持って発言することを児童に意識させていく。 ○ペア・グループ学習、全体の話し合いはどこでするのかなど練り合いの部分を中心にしながら授業を組み立てる。 ○学期ごとのアンケート結果をもとに、学級の課題を見つけて学級経営を修正していく。
豊かな心を育てる	素直で明るい児童が多く、男女、学年の隔てなく、和気あいあいと関わり合い、友達の良さを認めたり、温かい言葉をかけている姿が多く見られる。一方で、相手や場面にふさわしい言葉遣いや行動ができていない児童が少なく、そこで、相手のことを考えた言動・態度の日常化や、落ち着いた気持ちで生活する環境を自分たちで作る姿を目指す必要がある。規律ある生活をするために、「くらしのめあて」5項目と関連づけ、児童会活動による自治的な活動を通して、他者や物を大切に、自分たちで自分たちの言動を律する自律心を育てたい。	○相手や場面にふさわしい言葉遣いのできる子	○学級での目標設定、反省の実施 ○全職員による生活場面を捉えた日々の指導 ・全職員で継続的に指導に当たる。随時指導を大切にすると同時に、国語・道徳等の教科とも関連づけて、言葉遣いを扱った集中指導に重点的に取り組む。 ○「いいことみつっこ」の設置・活用を通して、児童が互いに認め合うことのできる環境をつくる。	○「くらしのめあて」(5項目)を定期的に振り返り(各学年・教職員)意識・態度の高まりを見る。全学年の達成状況を80%以上にする。	学校評価アンケート(9・10・14項目)の結果から、どの項目も80%以上の達成状況であったが、5月から12月を比較すると否定的回答が増えているものもある。また、保護者視点では、約3割が否定的な回答である。自己評価・他者評価ともに認められる実態をめざしたい。	B	○全校集会や児童集会、代表委員会など、機会をとらえて、全校・学級・個別で指導を行うことで、学校全体に風土を創っていく。 ○児童への意識付けとともに、行動化を促すことも必要である。手本となる児童・場面を認め、全体で共有し、全校児童へ手本を示していく。校内だけでなく、校外学習や他校の児童・先生との関わりなど、様々な場面・相手と話す経験も大切にしたい。 ○保護者にも児童の姿が見えるように、参観日や行事等で示していく。
		○規律ある生活環境を作り出せる子	○代表委員会で重点項目を決め、達成のための方策を学級で話し合い、取り組む。 ・児童に日々の実態を見つめさせ、各学級の課題や具体的な目標を考えさせ、実践する。また、学級活動や生活指導を通し、日常的な評価を行い、定着を図る。 ・学期ごとに、児童と教師の「くらしのめあて」達成度についての自己評価アンケートを実施し、意識付け・評価する。 ○委員会からの呼びかけにより、あいさつ、そうじ、ろうか歩行の自治的な意識付けを行う。	○朝のあいさつ運動の実施や、校内への訪問者・地域の方に対し進んであいさつする姿が増える。 ○無言で、時間いっぱい掃除する姿が習慣化する。 ○休憩始めの遊び場に向かう時や休憩中の遊びの中、下校時等に安全な廊下歩行を意識したり、呼びかけをしたりする姿が増える。	・アンケート項目13(児童)は、肯定的回答が80%を下回っていた。「いいことみつっこ」に取り組む児童にかたよりの児童を評価したりする。 ○そうじについては、児童の行動化を大切にしてい、「きたないからそうじをする」ではなく、「きれいな状態を保つためにそうじをする」という意識を持たせ、児童・教師による目標設定、教師からの評価、児童の振り返りを積み重ねて行動化につなげたい。	B	○全校集会や児童集会、代表委員会などの機会も活用して理想のあいさつやそうじの仕方を示し、指導をしたり児童を評価したりする。 ○そうじについては、児童の行動化を大切にしてい、「きたないからそうじをする」ではなく、「きれいな状態を保つためにそうじをする」という意識を持たせ、児童・教師による目標設定、教師からの評価、児童の振り返りを積み重ねて行動化につなげたい。
たくましい身体を育てる	本校において、日々の外遊びやスポーツ少年団等の活動を通し日常的に運動をしている児童と、そうでない児童の運動量の差は大きく、体力の二極化は取り組むべき課題である。また、生涯を通して日常的に運動することは、健康で豊かな人生を送ることに繋がる。そのために、小学生のうちに進んで体を鍛えたり、基本的な生活習慣を身に付けようとする意識を高めていくことが必要である。また、健康な体を保つためには、バランスのとれた食事など、食に関する知識を得ることは欠かせない。食の大切さと感謝の思いを実感していく必要がある。	○基本的な生活習慣を身につけ、進んで体を鍛えようとする子	○打吹山クロスカントリーを通した体づくり ○教科体育や体育の家庭学習に体力向上のための運動を取り入れる。 ○「健康調べ」を実施・集計して活用する。 ○生活習慣に関わる保健指導を行う。 ○なかよし班活動による体づくりに関わるイベントを企画・実施する。	○児童・保護者による学校評価アンケート(7月、12月)により、該当項目の肯定的評価を80%以上にする。 ○柔軟測定を2回実施し、児童の変容を見る。(6月、11月) ○「健康調べ」の各項目の達成状況を80%以上にする。 ○体力づくりに関わるアンケート(5月、2月)により、該当項目の肯定的評価を80%以上にする。	○評価方法(右記)に挙げた学校評価アンケートの達成値は、1回目・2回目のアンケートの両方で、児童は達成できた。しかし、保護者の回答において80%を下回った。 ○柔軟性については、一人当たり2.3cmの向上が見られた。 ○健康調べでは、概ねどの項目でも80%を達成できた。しかし、学年によっては、早寝とハンカチに課題が見られた。 ○体力づくりに関するアンケートでは、肯定的な回答をした児童が80パーセントを超えた。	B	○引き続き、柔軟性を高めることができる体育の家庭学習を行う。あわせて、児童が意欲的に取り組むことができるよう、測定の機会を増やし、目的意識をもたせる。 ○早寝とハンカチについての保健指導を行うなど、保健調べの結果を児童が振り返ることができるようにする。
		○食を通して、健康と感謝の思いを実感できる子	○学級での給食指導 ○公民館との連携 ○栄養教諭による指導 ○感謝の気持ちを高めるために、給食時間は放送をしっかりと聞く環境づくりを行う。 ○委員会活動による給食に関わるイベントを企画・実施する	○児童・保護者による学校評価アンケート(7月、12月)により、該当項目の肯定的評価を90%以上にする。 ○残菜調べの前後を比較し、残菜調べの前の30%に減らす。	○学校評価アンケートの達成値は、1回目・2回目のアンケートの両方で、90%を下回った。 ○残菜調べを行ったことで、残菜は減った。しかし、30%に減らせたかどうか、数値としての結果を残せなかった。	C	○道徳や各教科を通した指導をしたことや、栄養教諭による指導があったことを、学級通信やホームページに載せ、家庭との連携を図る。 ○給食週間などを通して、残菜の量ではなく、学級内での完食を目指す取り組みを行う。
創意ある教育活動の実践	城下町倉吉の中心地として発展してきた歴史と打吹山や玉川などの豊かな自然素材を有する成徳地区にある本校は、地域の特色を生かした教育活動を工夫してきた。また、児童は、集合学習・交流学習で他校の友達と一緒に学習・活動することを楽しみにしている。以上のことより、より主体的なふなふな「倉吉・成徳」の担い手を育成すること、集合学習・交流学習を通してコミュニケーション能力を高めることを創意ある教育活動の実践で目指す。	○地域の人と関わりながら地域のことを進んで学び、これまで受け継いできたものを自ら伝えようとする子	○地域の自然、歴史、文化、産業について、人材を活用した実践的活動の充実 ○本校独自の伝統の継承と主体的学習の推進(花運動、菖蒲相撲、打吹山クロスカントリー、みつぼし踊り、玉川清掃、倉吉イカ等) ○ふるさと学習年間計画の改善 ○琴櫻体育賞、橋田科学賞の充実	○地域教材・人材を活用した学習を各学年、年間3回以上実施する。 ○学校評価アンケートで「地域の学習が楽しい」と回答している児童を80%以上にする。 ○学校評価アンケートで「学校は、地域環境を活かした学習活動を充実させている」と回答している保護者を90%以上にする。 ○学校評価アンケートで「伝統的な教育活動が楽しい」と回答している児童を80%以上にする。 ○学校評価アンケートで「学校は、伝統的な教育活動を充実させている」と回答している保護者を90%以上にする。	○地域教材・人材を活用した学習は、成徳フィールドワークや総合的な学習、学校ボランティア等のGT活用でどの学年も概ね達成できた。 ○評価方法(右記)に挙げた学校評価アンケートの達成値は、1回目・2回目のアンケートの両方で、すべての項目において達成できた。	A	○引き続き地域教材・人材を活用した体験的な学習を充実させていく。各学年でさらに地域教材・人材の活用がすすめられるように年間計画の見直しを図る。 ○学習後、行事後に児童には感想やアンケートを実施する。保護者には、学習内容や行事内容の事前連絡、事後の報告等を学校だよりや学級通信を通して行う。
		○地域に誇りと愛情をもち、他校の児童と進んで関わりながら学ぼうとする子	○グループ活動での交流、集合学習後の感想交流の実施 ○地域人材の積極的な活用 ○集合学習担当教員を中心とした他校との連絡・連携と集合学習・交流学習の計画的な実施	○地域の方をゲストティーチャーとした集合学習を、各学年1回以上実施する。 ○学校評価アンケートで「他校との友達との学習は楽しい」と回答している児童を80%以上にする。 ○各学年2回以上、他校との集合学習・交流学習を実施する。 ○地域人材・ゲストティーチャーコーナーの掲示	○コロナ禍の影響もあり、集合学習自体が実施できない学年もあった。 ○評価方法(右記)に挙げた学校評価アンケートの達成値は、1回目・2回目のアンケートの両方で、達成できた。 ○各学年ともコロナ禍の影響があったが、概ね2回ずつ集合学習が実施できた。 ○地域人材・学校ボランティア・GTコーナー(写真と名前の掲示)は、来年度初めに作成・掲示する。	B	○地域人材をGTとして活用する集合学習は、内容が限られているため、来年度は評価方法を修正する必要がある。 ○来年度は、集合学習の実施回数を各学年3回ずつに増やすので、計画的に進めていきたい。